

はじめに

兵庫県森林動物センター（以下、研究センター）は、ワイルドライフマネジメントに係わる研究成果を、野生動物の保全と管理に関わる業務を行っている行政担当者や実務者、技術者、研究者などへ実務に有益な知見を提供することを目的として、平成20年度から「兵庫ワイルドライフモノグラフ」を刊行してまいりました。今回、第17号は獣害対策特集として8編を収録しました。

兵庫県では、兵庫県全域を対象とする獣害アンケートにより集落単位の被害や対策、住民意識（被害感情）についてのモニタリングを実施してきました。このアンケート調査は、野生動物とヒトの軋轢や対策の効果の評価に用いられています。第1章では、研究センターが2007年に発足してから発行してきたワイルドライフモノグラフを中心に兵庫県で実施された獣害対策についてレビューを実施し、獣種別の課題や共通する課題を抽出しています。第2章では、獣害アンケートから、鳥獣害問題は多くの集落にとって、重要な課題と認識されており、獣害に対する住民意識の高さが効果的な被害防除と対策の持続性に関係することが明らかにされています。兵庫県は獣害対策支援事業に力を入れており、2013年から35集落を対象とし、累計で200集落に及びます。支援の手法も開発され、10段階のステップを踏むことによって、シカ・イノシシによる被害面積は開始時に比較して軽減率が約6割になり、完全に防除に成功した集落もあります（第3章）。

その集落支援の要として期待されるのが、各県民局内に結成された複数の農林業関連部署から構成される「獣害対策チーム」です（第4章）。獣害対策チームが育成したモデル集落支援を通じ、獣害の低減を実現するとともに獣害対策のノウハウを身に着けることができました。第5章では、宍粟市における、兵庫県、兵庫県立大学と連携し、市内の旧町を単位とした、地域主体の防除と捕獲による「モデル集落」の育成について、第6章では兵庫県東播磨地域における、行政による組織横断的な獣害対策支援チームによる獣害対策モデルづくりを紹介しています。集落支援には地域特性に応じた対応が求められていることがわかります。

第7章と8章は被害対策技術の評価です。第7章ではアライグマの果樹園への被害を防ぐ金属・電気複合柵と捕獲の効果検証の報告で、手順を踏めば被害は防除できるとの明るい見通しがもてます。第8章では、慣習的に実施されている林縁緩衝帯整備による見通し環境の向上が野生動物の出没抑制にどの程度の効果があるのか実証したものです。その結果、林縁付近の森林を数十m程度の徐間伐を実施しても十分な被害軽減効果はないので、集落防護柵の機能の維持・向上を図るような林縁緩衝帯整備が現実的と提言しています。

以上の特集号の内容から、被害対策には、適切な技術を用い、対策を持続できる体制を構築し、効果の検証が肝要であることを理解していただければ幸いです。

兵庫県における獣害対策の進展とこれから

目次

第1章：兵庫県を中心とした獣害対策に関する研究や実践の経緯と課題	1
山端 直人	
第2章：集落代表者アンケートに基づく 兵庫県における鳥獣害問題および対策への意識の評価	14
高木 俊	
第3章：兵庫県における地域主体の獣害対策支援事業とその評価	28
山端 直人・渡邊 優・吉崎 正美	
第4章：兵庫県における集落支援体制としての「獣害対策チーム」の活動と成果	40
渡邊 優・山端 直人	
第5章：宍粟市モデル集落育成における野生動物被害の低減効果	51
吉崎 正美・田中 大輝・山端 直人	
第6章：兵庫県東播磨地域における行政による組織横断的な獣害対策支援とその効果	63
河野 賢治・藤原 誠・入江 匡彦・紙本 雅弘・野母 灯紗・今西 久美子・山端 直人	
第7章：果樹へのアライグマ被害解消のための金属・電気複合柵と捕獲の効果検証	77
井上 裕司・野口 和人・安井 淳雅・栗山 武夫	
第8章：ニホンジカ、イノシシによる農作物被害発生に関わる要因別効果からみた 林縁緩衝帯整備のあり方	92
藤木 大介	
附録 鳥獣被害対策のための体制構築	101